自證的眞實態への途

山本清幸

一

現實の眞實態は把捉の態度によつて種々に考へられる。併し如何なる立場に於ても常に絶對的眞實態を究竟の目的とし來たれるは言ふ迄もない。哲學の哲學としての批判的精神を缺く獨斷的立場に於てもこのことは變らぬ。かゝる立場の中、廣義の客觀主義に立脚するものは、哲學の原理、萬有の窮極根源を主觀的恣念を超ゆる客觀的有に求め、其處に絶對性を歸するに終始する有論的形而上學であり、哲學的思惟と窮極存在の相態とは無批判的に直接同一視せられる。それがかのギリシャ初期の自然哲學に於けるが如く、單なる經驗的有限物の絶對化より進んで、かゝる有限性を脱し、客觀の普遍性に對應する悟性に由つて先天性の方向に純化せられ、カント以前の形而上學の諸體系に見るが如く、合理的なるイデアの世界が確立せらるゝとも、經驗的直接態の流動的多樣性、非合理性と矛盾を來たし、それが標榜する客觀の意義を失ひ、主觀的形式主義に陷ることは見易き處である。之に對して、主觀的に又は心理的に確實なるものとして感覺を始源とする經驗的立場は、元來後天的であり、偶然性有限性を出でぬ相對主義に過ぎず、前者と共に、眞の絶對性全體性には到

り得ぬものであつて、其處に到らんとすれば、自己の立場の否定を將來する處の自己矛盾的なる獨斷的思惟態度と云へる。

かゝる獨斷的立場を脫して、哲學の哲學たる批判的見地より全體把捉の根據を自覺の統一に求め、全體の可能根據を其處に樹立する先驗的主觀主義が次に考へられる。其處に於ては先天的綜合判斷の可能に由り、哲學的思惟の不動なる地盤が確立せられるのであるが、それが反省的に主觀に徹底せらるゝと共に、主觀性が客觀性の根據とせられ乍ら、後者の根柢に物自體を殘存せしめ、又理論理性によりては不可得なるイデーの諸領域を結果した。この主客二元性、又有限性を超ゆると見らるゝ實踐理性の領域に於ても、德概念と幸福概念との打克ち難き二元性より、絕對性全體性は要請に止まらざるを得なかつた。道德原理そのものは自由の演繹の原理であるといふことが道德原理由附け可能の唯一の根據であつて、その全體的なる道德的世界觀は窮極に於て可想界に屬し、抽象的なる主觀的反省に終らざるを得ないのである。かゝる立場に立つ限り、物自體の如きものが先驗的に意義付けられて、內在化せられ、又絕對が道德的秩序として單なる要請から內在化せしめられて、實踐的實在性を附與せらるゝも、斯くの如き主觀的有限化は絕對性の喪失に外ならぬのであつて、主觀性と從つて相對性とを克服し得ぬことゝなる。若し此の立場を逆轉して高次の客觀主義に立ち、如上の主觀性を避くるとも、前と反對の意味に於て相對性を脫し得ないのであつて、總じて、

主觀客觀の如き或る抽象と限定を經たるものから出發する限り、旣にその出發點に於て克服し得ざる二元の矛盾を藏するものであると云ふべく、それが何等かの道程を經て主客合一を說くも、その出發點の有限性に累されて、如上の矛盾の眞に徹底的なる解決に由りてのみ明かにせらるゝ絕對とは無限に乖悖するに終るのである。此處に哲學的思惟は一つの最も根本的なる難點に逢着すると云ふことができる。卽ち、かゝる反省的思惟は自ら定立せる主客の二元に驅使せられて絕對への途を失ひ、相對的全體に止まつて、其處を脫せんとすればその反省的思惟そのものの全き放棄を經ねばならぬこととなる。この難點といふこと、又その超克に不可缺なる反省的思惟の自己否定といふことは最も徹底せる意味にて考察せらるべきであつて、媒介無く對立する主客の對立と相關の根柢を主客の何れか一方の他に對する優越性より導き出さんとし、或は如上の一方的偏頗を避け具體的現實性、所謂中の立場を採ると稱し乍ら、實は對立二元間に彷徨するに過ぎざるが如きことは此場合何等根本的解決を展示するものではあり得ないのである。こゝに當然問題となるものに主客の全體的合一、絕對者の直觀の立場がある。併し周知の如くこの直觀は神祕的と稱せられ、單に無內容なる絕對者の觀想として、先の有限なる反省的思惟の立場と融和し難く對峙せしめらるゝのが常である。而して具體性を缺如する斯くの如き絕對は絕對的絕對であり得ず、單に相對的絕對を把持するものとして、以上述べ來れる處の主客二元に纏綿せらるゝ有限の諸立場と共に否定せられ、この否定を

通じて、それらの具體的なる高次の統一が現せられ、それ等を生ける契機とする絶對的絶對が得られるとせられる。卽ち辯證法的思惟態度である。併し乍ら、それが自ら言ふが如く、眞に絶對的絶對に到り得るか否かは先に述べたる二元的なる反省的思惟の絶對否定、及びかゝる反省の斷滅に由る絶對者の直觀を如何に把捉するかに懸つてゐると云へる。對立より出發して對立に終る反省と、對立を越え有限規定を絶する絶對の直觀との絶對否定に由る綜合統一といふことが、絶對否定に由ると稱せられ乍ら、實は單に、かの反省とその反省の立場より見られたる又は豫想せられたる絶對の直觀との反省的な否定に由るに過ぎざるが如きは、反省的思惟が直面する如上の難關の不徹底なる把捉に基くものといはねばならぬ。ヘーゲルは論理に三側面の發展的形相を說いた。卽ち、抽象的悟性的、辯證法的卽ち否定的理性的、及び思辨的卽ち積極的理性的の三契機である。第一の悟性は、窮極の結論が有限的概念の固定化に終るところの自己矛盾であつて、この矛盾の止揚は批判的方法に於て見られたる如く悟性に由つては不可能なるものである。止揚に於て現れる他者への移行といふこと、換言すれば、悟性が本來的に有する有限的規定の自己止揚に由るかゝる超越は、最早單に外なる他者への關係に導かれるのではなくして、自己否定によつてその本性に到る內在的超越でなければならぬ。有限者の超克は外的ではなくして內的なのである。これが辯證法的否定的理性的なる側面に外ならぬ。有限者は他によつて否定せらるゝのではなくして自己の本質によつて自己を止

揚する。かゝる止揚は取りも直さず自己の絶對的本質への深化であり、これに由る有限者の絶對的肯定に外ならぬ。この概念的積極性は理性の頂點をなすものであつて、第三の思辨的と呼ばれたるものである。併しその反省的悟性の內在的超克といふことは悟性的なる外的超克を否定すると共に、悟性的なる內的超克をも否定してゐなければならぬこと勿論であつて、この超克は連續の斷滅を意味するものでなければならぬ。然らざれば絕對の入り得る餘地は全然存しないであらう。絕對は見られたるもの、推論せられたるものであることはできぬ。有らゆる有限的反省思惟を超越せる意味に於てこゝに一種の直觀が豫想せらるゝであらうが、かゝる直觀は勿論總ての相對的思惟以前の意識の直接態の如き統一觀ではあり得ないと共に、先の「思辨的」の一面を悟性の立場に於て孤立せしめ、之を以て最高のものとして固執する如き所謂神祕的直觀でもあり得ない。反省と直觀との高次の統一として辯證法的精神の立場を規定する時、かゝる直觀が意味せられ、夫が思辨の一面を形成するものとせらるゝならば、思辨は反省を出でぬものではないか。固定化せらるゝ直觀は單なる直接態に過ぎぬ。現實的には直ちに自己矛盾的なるものとして止揚せらるべき有限的抽象に過ぎない。有限的反省を超ゆると稱せられ乍らも、かくの如き直觀は、反省の立場に於て理念又は要請等の名の下に說かるゝ無限性或は絕對性に常に伴ふ表象に外ならぬとも云へるであらう。理論理性、實踐理性の何れよりするも、又それが單に消極的であるとか積極的であるとかに拘らず、有限から

出でたる無限、相對知から推論せられたる絕對知でしかあり得ない。直接知、直觀知の直接態は眞實には有限的なるものの否定を經たる媒介態であり、それにも拘らずそれが直接態として固定化せらるゝ時、そこには沒規定的絕對しかあり得ぬのであつて、かゝる絕對は未だ相對を脫せぬ處の相對的なる媒介態、有限化せられたる無限に過ぎぬ。反省から直觀への移り行きは一の相對から他の相對への移行である。反省的思惟の斷滅とは斯くの如き直觀知をも否定する。反省とかゝる神祕的直觀と稱せらるゝものとの關係は通常 Entweder oder とせられる。併し乍ら前者に於ても體系を樹つる限り、その根柢としての絕對性全體性を主客の何れか一方の他に對する優越性に由つて說くものであつて、其處に一種の相對的絕對を見る、而してこの絕對者は無媒介的に對立する主客の對立相關の根柢としてその構成原理を爲すが故に、最早對立的なる一項ではあり得ない、と同時に、それが非我・非非我的なる或るものでもなくして絕對的主觀又は客觀とせらるゝのは對立から出發する反省の當然な歸結である。無意識的であると意識的であるとを問はず、又如何なる相態に於て意識せられ說かるゝとも、反省の窮極的結論は其處に導く。若し斯くの如き絕對的主觀主義、客觀主義をも避くるならば二元論に陷るか然らざれば沒批判的獨斷主義に陷るより外はない。倩、かの直觀知に於ける沒規定的なる主客合一の直接的絕對は、對自的には相對對立の否定を媒介とするものなるが故に、現實にはその直接的統一が破られ、その合一態は具體性の單なる一面として反省の對

立に引戻されて、上述せる處の對立の一項と不一不二なる絕對的主觀又は客觀とせらるゝのである。かの思辨的積極的理性的論理はこの絕對的主觀主義に成立するものであつて、その體系は絕對的觀念論となる。卽ちイデア的絕對は結局見られたるもの知られたるものを出でないのであつて、知る我見る我は飽く迄殘存せしめられ、絕對は主觀と定義せられて、對立に成立する知は對立的主觀と不一不二なるこの絕對主觀の自覺として意義附けられる。意識自意識が異にして一なりとせらるゝのも絕對の論理を把捉し乍ら、同時に主觀主義を脫せぬことを示すものであつて、かゝる主觀的辯證法の論理は後述するが如く現實的行爲の世界に於ても主觀主義を將來するものである。かゝる主觀的絕對は客觀的絕對と共に相對的辯證法に屬するものと云ふべく、その辯證法的統一も眞には全然無媒介に對立するものの統一ではあり得ぬであらう。卽ち、總ての對立的有限者の根柢とせらるゝ絕對者が神祕主義的な沒規定的絕對でもなく、又相對的なる有でも無でもなくして絕對無とせられ、辯證法的に概念把捉せらるゝとも、それが如何なる意味に於ても主觀の自己性を絕せるものならば、相對的對立もその統一も考へられず、二元論に陷るか、然らざればスピノザに於けるが如く統一の根柢として獨斷的なる實體槪念を導入せざるを得ぬ結果となる。それ故哲學の哲學に立つ限り一般に體系を目指す哲學(觀念論)は斷念せられるより外はない、それを避け飽く迄絕對的全體の學として哲學を樹つる以上、何處迄も絕對者は主觀であるといふことが保存せられねばならぬとせられる

のである。斯くの如く、反省の單なる有限的悟性論理を超えて、辯證法に立ち、具體的絶對を概念把捉するとせられ乍ら、主觀を脱し得ず、それを最後の根據とせざるを得ぬのは何に由來するかといふに、それが有限相對の絶對否定を經るとせられ、否定卽肯定、相對卽絶對と說き乍ら、實は相對に終始するに過ぎざるが爲に外ならぬ。卽ち、先の反省と直觀との「あれかこれか」は眞の「あれかこれか」ではなく、單に主觀的なる觀念辯證法にて統一せらるべきものに過ぎなかつたのである。絶對的基體が觀念の固定化である獨斷的乃至神祕的實體であることを避けて、相對と相卽せしめられ、主觀を始源とするものでなく主客を契機とする直接の現實より出て之を絶對無の辯證法により自覺するとせらるゝも、この絶對は絶對主觀であり、一種の固定せられたる觀念であつて、相對と絶對の間には「あれかこれか」の斷絶はない。「あれかこれか」とは途は一つであるといふことである。一と他との間には無底の斷がある。其處には一か他かのみがあつて中はない。この凡有の相對的想念の斷滅を經ざる時、辯證法も相對的であり、觀念辯證法か唯物辯證法に陷つて具體的な現實を把捉し得ない。眞に無媒介に對立するものの間には一の他に對する優越性に由つて綜合することは許されないのであるのに、相對的辯證法に於ては何等かの意味に於て斯かる優越性を認容せざる限り辯證法の論理は成立しないとせられるのである。斯くの如き相對を避け、眞の絶對を把捉し得る絶對辯證法ともいふべき論理はかの斷滅なくしては成立し得ないのである。然らざれば假令相對

的辯證法ならざる絕對的辯證法を說くとも、絕對は單に豫想せらるゝものに止まらざるを得ぬこととなり、非合理の世界は非合理として合理的に捉へられるに至るは必定である。通常神祕的直觀といふ名に一括せられて理解せらるゝ非合理の世界は單にかくの如きものに過ぎない。それは自稱するが如く「あれかこれか」の綜合的解決ではなくして根本的矛盾を合理の世界に解消するものに外ならぬ。無媒介的對立が何等の意味に於ても統一せられざるものならば相對に墮するより外はない。かゝる對立は非合理である。而してこの非合理の合理化は非合理の遠離に外ならぬ。合理に由る非合理と合理との綜合に外ならない。卽ち最初より絕對に對立する二元はあり得ず、根柢は究竟相對的一元なのである。辯證法に立脚しながら相對を出でぬ。批判主義の理性は消極的であり、現實的には二元論的であつた。相對的辯證法の理性は積極的ながら現實的には抽象的一元論的であり、窮極合理主義に過ぎぬ、其處に問題とせられ一契機として辯證法の論理に與る非合理は合理に由つて合理の否定と見做さるゝ非合理に過ぎないのであつて、合理は非合理に對して飽く迄高次的とせられる。その結果、相對的辯證法を避け乍らも、主觀は客觀に對する論理的高次性を保持して觀念論を出でず反省の彷徨的思惟と共に有限に終始する外はない。眞實態を把捉せりと私念する時それは最も眞實態と相隔たるのである。

眞實態は何ものに由つても顯示せらるゝことはできぬ。一切の外的反省、外的規定を遠離する。

即ち自證的でなければならぬ。併し乍ら、今迄述べ來れることより明かな如く自證の自己性は主觀のそれではない。通常自證といふ時、個別的主體卽ち我が特殊的有に縛せらるゝ我性を否定して、自己の本源たる絕對に還り、その自己實現として無媒介的なる主客の對立を止揚し、それが常に有限的統一であり乍ら絕對の實現であるといふ意味を擔ふ處の相對卽絕對的なる個別的自我の道德的行爲に由つて絕對的眞實態を證示するといふ謂に理解せられ、自證の自己性は主觀、主體として把捉せられて居る。眞實態はかゝる限定を經たる相對者に由つて證示せらるゝ時、何處迄もその有限性を脫し得ざることは前述せる處である。眞實態は眞實なるものそのものの自證でなければならぬ。斯く言ふ時、直ちにそれが何等か神祕主義的な實體の自證とせられて、獨斷的であり、現實の主體的實踐を抹殺する處の觀想と解せられ、自己同一に止まる抽象と評せられることはかゝる批評そのものの有限性に由り當然豫想せられることであるが、それが描く自證的眞實者は有限化せられたる無限、相對化せられたる絕對であつて批評の立場そのものの埒內を出でざる自らの影に過ぎない處のものなのである。それ故かゝる批評はその批評の有限的思惟進展の契機とはなり得ても、此處に言ふ自證的眞實態に觸るゝものではあり得ない。それが自證的眞實者の下に神祕的實體を豫想するのは自らが相對的なるもの、主觀又は客觀に何等かの意味に於て自性を立て、それを固定せしめ實體化してゐるに由るのであつて、斯くの如き觀念に執する限り結局は諸法實有の邪見に陷り彷徨的

態度に終らざるを得ぬであらう。自證的眞實態は一切のかゝる有限的想念の斷滅を經てのみ明かにせらるゝのであつて、かの相對と絶對との「あれかこれか」の安易なる解決は許されぬ。相對の否定は絶對的である、而してこの否定は否定卽肯定といふ相對的辯證法の論理を意味するものではない。辯證法が絶對的であり得るのは中に立つからなのではなく絶對に立つからに外ならぬ。絶對とは相對の超越的根柢とか云ふ如きものではない、相對に媒介せられざれば無限定的抽象に陷るといふが如きものではない。而してそれと共にかゝる抽象的絶對と具體的相對との辯證法的綜合でもない。斯くの如きものは總て觀念の固定化を出でぬ。先づ斯樣なる固定的絶對觀念とそれに由る辯證法的思辨を斷ちてのみ絶對への飛躍があるのであつて、然らざる限りこの飛躍も連續にて考へられ、論理的明證を有つものとして合理的に捉へらるゝ非合理的飛躍とせらるゝに過ぎざるものとなるであらう。途は唯一つである、一切の外的望見は虛僞の幻影を捉ふるに過ぎない。眞實態は本來淸淨的であつて離垢淸淨的なのではない、而も顯示正義は常に邪執の對治を伴はねば不可能である。對治とは他に對して自を立することでも、自と他との綜合でもない。眞實には有らざるものへの執なるが故に破せられるのである。迷妄なるが故に斷滅せられねばならないのである。それは對峙ではなくして迷妄を迷妄の內より自滅に導くことに由つてのみ可能なのであつて、このことなくして眞實態を說く時は對峙に終つて常に誤解を招き、その結果眞實態の把捉を益々困難ならしむることとな

るであらう。即ち公開的なるものから出發せざる對峙的なる自證は、他なる有限的思惟をして自らの觀念を固定的に自證的眞實態に投入し、之を以て神祕主義的彼岸に屬する觀想に過ぎざるものと私念せしむるに至るのである。こゝに問題となれる相對と絕對との二者擇一的斷絕は相對的相對と相對的絕對との對立を意味するのではない、それは相對の領域に於ける對立に過ぎない。眞の擇一は其處にはない。擇一は相對的絕對と絕對的絕對との危機的對立にのみある。それは迷妄か眞實義かの擇一である。相對の否定がこの斷絕を意味するものでなければ否定即肯定の辯證法的統一も絕對的ではあり得ないであらう。若し辯證法が反省の彷徨的思惟に於ける相對と神祕的直觀に於ける絕對との統一に成立するものならばそれは有と有との有的統一に過ぎず、一の否定は他への移行即ち他の肯定であつて、一と他とは連續的な合理的對立であり、かゝるものの統一は矛盾の解決ではなくしてその平板化に過ぎない。それが如何に對立的契機の一異を同時に存立せしむるが如き統一を說くとも、何れか一方に偏し相對的であるを免れぬのは此處に由來する。然らばかの斷滅といふは如何なることを意味するであらうか。

二

先にも述べた如く觀念論の立場は相對的觀念論でなく絕對觀念論の立場に立つとしても、その絕對性の根源は、主客の相對對立性を超越し而もこの對立的相關々係を成立せしむるその根柢である

絶對者が飽く迄主觀であること、即ち絶對我であることにある。勿論この絶對主觀は主觀主義に於ける如く相對主觀ではなく、客觀と共に斯る主觀をも超越し、それ等存立の根柢となるものであるから、一面何處迄も單なる主觀を超ゆるものであつて、固より客觀性の依存するその根柢であり乍ら實質的に客觀を成立せしめ得ないカントの理性主觀の如きものではない、即ち主觀と共に客觀をも成立せしむる內面的原理なのである。從つてかゝる絶對我は相對的自我性との間に一つの斷絶を經ることなくしては到著せられ得ぬ、換言すれば主觀の自己否定に由つて自己に對立する客觀をも否定してその對立を絶對主觀の自己性の內に止揚することに於てのみ自我は絶對である。このことは他面より見れば絶對は對立とその否定を媒介としてのみ絶對であり得る、獨立者の對峙は不可缺なのである。併しこゝに最も注意せらるべきはこの絶對主觀が相對主觀と連續ならざる、質を異にする斷絶を示しながら同樣に主觀であることである。この一點が觀念論、相對ならざる絶對觀念論成立の本地を爲すと共に、それが脫し得ざる本質的限界の據處なのであつて、我々が前に考察せる危機的擇一といふこともこの點に歸せられたのである。相對か絶對かの危機に際して絶對の一途を擇ぶことが相對的なる諸立場のみならず絶對觀念論の立場からも常に神祕主義的同一哲學を出でない觀想と解せらるゝのは、その立場に於て絶對者が主觀とせられ、それが相對主觀の否定に由りて歸入せらるゝ絶對我の自己觀照とせらるゝからに外ならない、即ち觀念論に於ては相對主觀と絶對主

觀との超越的非連續は連續的非連續に過ぎないのである。絕對主觀が如何に對立的主觀客觀の對峙的獨立性、無媒介的對立とかゝる獨立者の相關々係を成立せしむる原理であるとせられても、換言すれば、主觀の相對と絕對との辯證法的二重性の故に無媒介的相對對立の相關々係が絕對者の自己自身への關係であることに由つて可能となり、又この絕對者の自己同一性が直ちに無媒介的對立者の關係であることに由つて抽象的無差別を免れて媒介なき獨立者の對立といふ現實性が保持せられるといふこと、即ち意識が自意識であり自意識が意識であることに由つて絕對が具體化せられるとしても、斯かる絕對は無媒介的相對對立の無媒介的媒介に由る統一ではなく、眞の絕對ではなくして相對的絕對に過ぎない。勿論、絕對我は相對我の延長でもその極限概念でもなく、その間には一種の斷絕的否定がある、兩者は次元を異にして相對我の否定に由る絕對我への歸入は飛躍的である。それにも拘らず絕對は何處迄も主觀でなければならぬ。それなくしては一般に觀念論は存立し得ない。而も實にこの點にその蔽ふべからざる限界がある。即ち客觀の獨立性はそれが絕對主觀の分裂の契機であるが故にのみ相對主觀の獨立性と同等のものであり得るのであつて、かゝる客觀は主觀に由つて主觀の否定と見られたる客觀に過ぎない、それは內なる外に過ぎない。主客はこゝに無媒介的に對立するものでないこととなる。このことは絕對主觀が相對對立を超越的に包むものとして非有非無的なりとせらるゝも畢竟有的なるを免れ得ぬといふことなのである。斯くの如き絕對觀念

論の具體的絶對が相對的絶對に過ぎざること、その根源は相對と絶對との擇一的危機の不徹底な把捉にあることが明かとなる。否、寧ろかゝる立場にては未だ眞の「あれかこれか」の危機はないといふのがより適切であらう。其處に於ては絶對者は或る見られたもの、知られたものである。自我にとつて最も直接なもの、疑ふことのできぬ明證をもつたものは自我である、この主觀の權威が何處迄も失隕せられることなく振舞ひ得る間は危機はない。そこには眞の矛盾が存しないからである。主觀の統一を破る客觀は主觀に依倚するものに過ぎない。一見自己否定の深淵から生れ出でたるが如き絶對は實は平靜な調和に過ぎない。かゝる主觀的絶對は有であり相對的有限者であつて、それが無媒介的相對對立を包むとせられる時、この絶對が如何に對立の超越的根柢であり、其絶對自覺が對立を媒介としてのみ可能なるが故に對立者の獨立性を十分確保するとしても、この獨立性そのものが既にその根柢たる主觀の有に繋縛せられたものであるのを免れ得ない。客觀の獨立性の承認といふことが既に不純なのである。從つて此自我性を脱却し得ざる限り現實には具體性を抹殺し去ることとなるべく、それを避け對立の直接的具體性を飽く迄尊重しそれを内に包む統一の超絶的根柢を絶對無とするならば、如斯無は單に豫想せられ、要請的に信憑せらるゝに止まつて、統一の積極的自得には到達せられず、現實の生に於ては相對對立の無限相剋の苦惱を脱し得ないであらう。要請的信憑は歸入ではない。如何に必然性を有するとも仰望的信憑の確實性と自得の明證性との間に

は雪壤の乖離がある。自我の絶對に對するかゝる信賴信憑に止まるは絶對性が自我性を脱却することなくしては畢竟不可得なることの自證告白である。この告白は勿論、かの絶對主觀の自覺の側面に執して峻嚴なる對立の具體性を閑却し去る單に反省的な觀想には存しない。反省的態度に於ては絶對無は觀られ得るものに過ぎないからである。かゝる觀は自得ではなくして觀念の實體化である。其處に於ては信憑の如きは對象性に纒綿せらるゝ表象の意義しか有せぬものとせらるゝに過ぎないであらう。絶對性に對する信憑は矛盾に滿ちた現實の生に直面する者のみが體驗する。自我性を斷じ得ざる限り絶對は要請乃至豫想的信憑に止まる、而も自我性の斷絶は未だ單に死を意味してゐるに過ぎない。生には絶對の自得がない、況んや死には何の自得があり得るか。觀想を避けんとすれば生は無限の相對的相剋である、絶對の自得なきこの生は同樣に死に外ならない。生死共に死である。生は自我性を根柢とするが故に生なのであり、自我性を根柢とするが故に絶對を喪失し、死なのである。かゝる死を回避して自我を斷つならば、それは自我に由つて提起せらるゝ自我の否定であり自我性の極限的頂點を爲すものなるが故に同樣に虛無的死に外ならない。斯くして自我性の斷滅とは生をも死をも意味するものではない。此處に初めてかの擇一的危機が當面の問題となる。凡有の相對を絶して眞に絶對的絶對を把捉するかに見ゆる絶對觀念論は絶對が主觀であるとせられ乍ら具體的なる生、實踐の領域に於て觀想に墮せざらんが爲には對立的主觀が信憑に由

つて絶對性を獲來り眞に獨立的に他者なる客觀と統一を遂げるより外はなかつた、而してかゝる信憑に裏附けられる絶對の證示は要請的必然性は保持し得るも現實性に迄到著せらるゝことは不可能である。それは絶對性の斷念に外ならぬ。若しもこの證示が信憑の不十全性を免れ、自我が絶對的統一態を現實的に自證すると云ふならば、根柢に於て自我の絶對化が行はれてゐるのである。主觀の高次性といふことに飽く迄固執してゐるのである。かくしては非合理的なる現實の對立も合理の側面から尊重せられ堅持せられるのみであつて、かゝる對立は眞に直接的なのではない。客觀の原本的獨立性といふことも絶對主觀から演繹せられる第二次的なものに過ぎない。客觀の獨立性が原本的として强調せらるゝとも、それを缺く時は合理性そのものの失隕を招くからなのである。自我に由つて自證せられる現實的絶對統一は結局主觀的であるを免れ得ないであらう。最終の權威は何處迄も主觀に置かれるのである。斯樣な絶對主觀主義には破綻の機はない、未だ危機は自覺せられ得ぬ、自己斷滅なくして絶對に立ち得ると私念してゐるからである。主觀の自由自發性の確證性に依據してそこに絶對を樹つる以上その背後は無意味である、絶對主觀が無底の底をなすに過ぎないからである。併し乍ら、この主觀的絶對が無媒介對立の相關々係の根柢でありその關係の中に自己を實現するものなる時、かの對立は如何に無媒介なりとはいへ最早直接的な生動ではない、主觀に歪曲せられたるものに過ぎない。客觀の如何にしても主觀に化し得ざる絶對の外な

る運命性はその儘安易に超克せられてゐるものに過ぎない。何故かといふに對立の一方的なかゝる運命性は觀られたるものであり、眞の運命ではないからである。それは無前提の率直な運命觀ではない、常に主觀から見られたる客觀に過ぎない。それは客觀が與へられたるものなることをのみ知つて主觀が同樣に與へられたるものなることを知らない、客觀を自由の埓外にある運命とする主觀の自由といふ絕對的權威そのものが運命なることを知らない。主觀のこの運命性は主觀によりては超克せられ得ない、主觀が超克し得るのはそれ自身絕對主觀を根柢とする客觀の運命性のみである。併し乍ら、眞の客觀の無媒介的獨立性はこゝには見失はれることは、繰返し述べた如く絕對主觀たる理性に由つてその儘合理的なりとせらるゝ非合理者がこの獨立性だからである。この理性の辯證法は觀念論一般の限界を脫し得ない處のものなのであつて、具體的に實現せられる絕對統一は假令觀想ならずとも主觀的なるを脫し得ない。主觀が自證する絕對統一の明證性は絕對主觀の齎すものに過ぎない、それ故かゝる統一の絕對性は眞に危機的なる相對相剋に於ては決して直に自證せられるのではなく、その絕對の感得は反省に於てのみ合理的に觀られるものである。支ふるものは理性のみである。理性は自由に由り終息なき相剋の中に主となり得ても自己の運命の奴たるを免れぬ、自らに主たることはできぬ。それは繫縛である、非自由である。理性に從ふことが如何にして必然的でなければならぬか、それが何故に絕對的であるかの問には、理性は答ふることを知らぬ。理性

そのものが有限者に過ぎないからである。茲にかの自證の絶對性は支ふべくもない、自證が眞に絶對統一のそれであるが爲には統一の根柢は最早絶對主觀たる理性であることはできず、反省的に觀らるゝ絶對無ではなくそれは信憑せらるべきものでなければならぬこととなる。信とは合理性の限界を示す、自我性の終局を意味する。併し乍ら之が單に合理から見られたる非合理を暗示してゐる間は自我性の限界の消極的指示に過ぎなく、絶對性の自得に到り得ざることは明かであらう。卽ち先に考察せる要請的信憑を避くる絶對合理の信は何處迄も自己信賴を出でぬ。絶對は主觀なのである。畢竟理性を出づることはないのであつて、絶對性自證の自己信賴、自信は反省からのみ、反省的絶對からのみ生れる。二元論にもあらず主觀的一元論にもあらざる絶對觀念論は絶對主觀主義に終るのである。辯證法的なる否定肯定は理性の內に行はれる。無媒介的媒介の根柢たる絶對無は相對的絶對無を出でない。こゝには絶對は得べくもない、生も死も共に死であるといふ先の自我性の矛盾は茲にも決して解決せられてはゐない。斯かる立場の僞りなき告白は根本的な不安苦惱であること否定できないであらう。生も死も、進退共に死である茲に擇一的分岐點がある、眞の相對と絶對との無底の斷絶は相對的生死界と眞實態とを分つ深淵なのである。反省的態度には存し得ないこの危機は現實には如何に現れるか、その具體相は如何なるものであらうか。この危機が常に安易にのみ把捉せられ、その爲に眞實態からの乖離を將來するのは、それが生の如何なる領域に於て如何

に把捉せらるゝに由るのであらうか。

三

反省は觀念を出でない。反省に於て捉へられる絶對は絶對の主觀的相對化を免れることができない。それは單なる概念に止まつて概念そのものとその實在性とが未だ一つになつてゐない。その反省が外的悟性的なものでなく内在的なものであつても單に理性の消極面を捉ふるに過ぎない。その積極面のみが實在の論理たる辯證法を成立せしめるのであつて、その概念は「思辨」的でなければならぬことはヘーゲルの言ふ通りであらう。而して有らゆる現實が自我であるといふ絶對的自我たる理性が具體的絶對であり得るのは理性的道德行爲に於てゞなければならず、世界と自我とがかゝる行爲に於て一つになる時理性は精神となるとせられる。それがかの絶對知に於て最後の絶對統一を現ずる迄統一の根柢となるものが常に絶對主觀の自己性であること、それにも拘らず具體的絶對統一が現せらるゝと云ふは如何にしてゞあらうか。

精神としての理性道德は勿論カントに於けるが如く主觀的道德性に盡きるものではない。個別的意志に於ける自由の直接性は現存的充實性を單に外に有するものとして、その自己性は抽象的であり空虛である、この本質なき自由意志の自己内反省態として、自己の現實存在を自己内に有する普遍たる理性の自由が道德性の本質をなす。從つて他律的適法性から區別せられる自己立法的なる自

律的道徳の純粋性は先驗的心術に保持せられてゐる。併しこの主觀に徹せられる理性の自由がその本質を先驗的心術にのみ保持する時、現實的には當爲に止まらざるを得ぬこととなり現存的自由には到り得ないのであつて、自由の概念は主觀の內にのみ現實態をもち、主觀は現存する實體とはなり得ない、現實となれる自由は要請に止まる。絕對的統一は要請的可想界に屬するのである。この概念と實在との乖悖は統一が相對的であることに歸せられる。かゝる主觀的自由の現實態は、理性的意志活動の唯一の直接的地盤である個別的意志がその內なる本地を理性なる普遍者に有し、卽自的にそれとの合一を遂げてゐるのであるが、現存の根柢は常に特殊なる客體的境であることに由つて、個別者自我はそれ自身主客の矛盾的統一をなしてゐるが故に、飽く迄理性の本地に立脚する善と、境に沒入する惡との異質的二自由の相剋として現れる。此場合一方への固執が許されぬことは言ふ迄もない。多なる個別者が同等性を以て認知し合ふ道徳の純粋性、卽ち良心は單なる普遍であり、客觀的有は單なる特殊であつて個別者の餘地は何れにも存し得ない、何れも虛無なる面に過ぎない。一の否定が他の肯定として他者への移行を結果するに過ぎないところの此立場は端的に有限的なる悟性に立脚せるものである。戰ひの中にある道徳的心術がかゝる矛盾を止揚し得るものとせられるには實踐的理念としての要請的絕對への信憑に由つて反省的にそれへの合目的性の意味判定が必要とせられる。併しかゝる合目的性が道德律の最も嚴密なる遵奉によるも何等期待し得ないも

のなることカントの言を俟つ迄もない。この相剋が解決せられぬ以上個別者である具體的主體と客體的境との具體的統一も多なる道德的主體の統一も考へることはできない。自由の現實存在に於ける個別的主體にとつては、その現實存在の故に存在に著する幸福原理が同樣に本質的目的であり義務でなければならぬ、併し獨立的なる幸福原理が本質的であるならばそれは同樣に個別的主觀的な顚倒であつて、かゝる惡なる自由の極は死を意味することは言ふ迄もない。二つの相對的自由の抽象はこゝに廢棄せられねばならぬ。

現實的なる理性の自發的目的行爲が自由意志の概念を客觀的存在に迄實現する時世界は自己の世界である。この現實態は個別者の行爲に由る普遍的理性の自己實現的作爲であり、現存する客觀精神として行爲的個別者實存の根柢であつて、それは必然的動向を自己の内にもつ歷史的實體たる精神物である。この自由の現實態は理性的意志とその特有なる直接的現存基體たる個別的意志との統一に由る。それは實體的意志であるといふことができる。實體的意志は客觀精神の謂であつて歷史的社會的必然性を擔ふものであるが故に、必然性の根源である客體なる實在の獨立的原理は飽く迄原本的なものとせられねばならぬ。從つて此處に於ける實踐的心情は、普遍と個別の心情的和解に止まつて、その内に實體を解消してしまふ處のかのフェノメノロギーに說かれたる schöne Seele の抽象に陷ることは許されぬ。個別的自我性の實在的否定なきかゝる統一は「僞善」に導くものなので

ある。眞の惡は却て其處から生れる。普遍との統一を遂げたるものと恣念せる「美しき魂」は、實體としての客觀精神の實在的必然性から擅斷的に超出して、自己の直接的内的聲を神的聲とし、意欲の中に任意なる内容を置くことに由つて現實には個別的傾向性に身を委ね、「惡」に轉ずるのである。行爲することは惡であり單に自己内に止まることが善である。こゝに「惡」なる意識と道徳的に「判斷する意識」の對立が生ずる。併し實現する現存的行爲的個別と判斷に止まる普遍とは具體的行爲の契機をなすものであつて、この實存の行爲と非存在的義務とが各々その相對的限定を放棄する時「宥恕」的統一が現せられる。その相互の認容に由る普遍と特殊的個別との自意識的な現存的和解は意識自意識の實在的融和として、一般的本質たる自己の純粹知を個別としての自己の純粹知に於て直觀するといふ實在的精神が和解に於て現じ、精神は絶對となる。「美しき魂」なる卽自的統一、卽ち概念の純粹性から分裂して實存の世界に歩み入り、この自我分裂の實在的統一を經て、精神が自意識なる知の純粹統一たる「絶對精神」として現れ來つたのである。併し精神の普遍は飽く迄實在でなければならず和解は現存的でなければならぬ故、精神が絶對となるのは客觀精神を媒介とせねばならぬ。實體としての客觀精神は常に歴史的であり特殊である處の個別的主觀と普遍的主觀との合一態である。それ故、主觀の個別と普遍との二重性なる矛盾が辯證法的統一を自覺する不可缺の契機がこの精神的實體としての客觀であると謂はれる。併し乍ら、斯くして個別的主觀を通じて特殊

的にのみ自己を實現する普遍は、主觀客觀の道德的行爲に由る統一が普遍の實現として、常に特殊的固定化として單なる特殊への顚落といふ運命を包藏する處から、この運命を岐點として、主客の、從つて、主觀の側に於ては個別と普遍との新しき分裂が將來せられ、更にその統一、又分裂と、無限に繰返される運動の中にあつて自己を實現し乍ら、その特殊の中に沒せられるものでなくそれから超絶するものでなければならぬとされる。この客觀の主觀に對する原本的獨立性のために統一が常に破られ乍ら、この分裂の契機に由りてのみ自己を實現し、統一が否定されることに由つてより高き統一が約束されるといふ時、かゝる分裂と統一とはその絶對的根柢を超越的絶對統一に有するものといふべく、客觀精神たる基體は又絶對主觀に包まれるものである。主觀も實體も窮極に於ては同一であるに過ぎない、從つて實體の實在性の根源である客觀の原本的獨立性も絶對主觀に於て意義をもつものであるより外はない。絶對主觀たる精神の自己疎外の契機となる客觀の獨自性は主觀の絶對性顯證のために何處迄も强調せられるのである。對立の非合理性は精神の合理性に包まれてゐる。ヘーゲルの精神の概念はその實在性を精神自身にもつものである。實在性と概念とは精神に於て同一となる、卽ち絶對的イデーである。それ故このイデーは、實在的客觀を自己否定の契機として自己を疎外しその分裂的統一に於て實存する絶對として主觀の絶對性を自證するに由つて、無媒介的對立者客觀を辯證法的に自己に包む實存的主觀の概念である。而して精神の現存は常に特

殊的であり、その歴史的進展の無限系列を統一するものは積極的理性たる絶對主觀である、それが世界史を意義附けるものとして進展の究竟目的でもあり又究竟原因でもあると見られる。これは辯證法的絶對合理主義といふことができる。併しそれが如何に辯證法的にであるとしても非合理性の合理性への解消、主觀の客觀に對する優越性を根柢とするものであることは否定できぬ。絶對普遍の主觀は勿論相對的主觀ではない、それは主客の相對對立を超絶する。それは對立の根柢であり、對立的相關關係の運動の中に自己を顯證し乍ら之を包む絶對的全體である。それ故無媒介對立を包むこの絶對は有らゆる相對的規定を遠離する絶對無でなければならぬ。この眞空とも云ふべき絶對は如何にして證しせられ得るか、眞空とは相對的有無の辯證法的統一なのではない。相對を契機とする綜合は又相對を出でぬ。個別的自我がその直接性を否定して自己內反省を重ねてもそれは自我からの自我性への高揚であつて、かゝる反省は反省的に觀らるゝ絶對に撞著するに過ぎない、それは自我觀念の絶對化に外ならぬ。反省には絶對的自己否定はない。然らば觀念的ならざる實在的否定は如何にして可能であらうか。

精神が絶對性を證示し得るのは、個別的自我が自己の實在根據であり、同時に自己の本質の否定原理である客觀的境に自己を沒し去り精神的に自滅するに外ならない處の實踐的感性を否定し、而して自己の本質たる普遍的理性に立脚して客觀を自己に化する道德的行爲に由つてゞあつた。其處

に一種の實在的自己否定がある。併しこの否定は自我が衝動的傾向性に死して理性に甦へるに過ぎない。理性は主觀客觀の相對對立を包む絕對主觀としての精神であるが故に理性に生きることは成程絕對に外なる客觀の運命を克服してゐる、併しそれは主觀の運命を免れてゐるのではない。而も客觀性の運命が斯く超克できるのはその非合理性が辯證法的に絕對主觀の合理性に溶融せられ、最初より反省的に絕對に外なる否定的力が抹殺せられてゐるからに外ならぬことは先に述べた如くである。絕對主觀に止まつて背後の深淵を覺せざる間は主觀の運命は絕對自由として謳歌される。併しこの主觀の運命を超克できざる以上自由は絕對ではない、それは自由に止まつて自由の自己完成には到達せざるものである。自由は理性の自由に蠢きるものではない。人間が脊負ふ眞の苦惱は道德的苦惱ではない、惡は理性に由つて超えられ理性の救濟に由つて自己慰安が得られる。眞の苦惱とは絕對自由が獲らるべきを覺して途を知らざる處にある。非合理の合理たる辯證法の絕對合理主義は絕對善に由つて現實の肯定は說き得るもかの惡魔主義を包むことはできぬ、それは此合理主義が强調する客觀の原本的他者性が尙主觀的なるものに傾き、合理的非合理に過ぎざるがため、現實には客觀性の根源たる物性をその直性的支配力の儘に放置するからに外ならぬ。全然個別的な自我の衝動的欲望の至上化を醜惡と見、自由を自ら放擲する自殺的行爲に過ぎないと嗤ふのは此場合何等眞實に觸れるものではない、衝動的自由の至上化は却つてかゝる合理主義の無力に對する痛烈なる

反撥に外ならぬからである。物と精神、惡と善とは各々絶對性を持して對峙する、それは一と他であつて統一の餘地はない。若し統一の餘地がありとすれば、斯かる統一は、悟性的なる一から他への移行に過ぎない處の外的反省の事柄ではないにしても、自己内反省に止まるものであつて、無媒介對立の統一といふ辯證法の態度を如何に强調するとも自己同一を出づるものではない。辯證法が相對者の一の相對的絶對化に成立するものでないことは論を要せぬ、それは悟性的反省に立脚するものだからである。併し乍ら相對的一の絶對的卽ち辯證法的絶對化に成立する理性の辯證法が無媒介的相對對立の無媒介的統一を示すものではなく、媒介の無は一の他に對する優越性を根柢とし、その限り再び相對に陷ることも必至的である。勿論無媒介對立の辯證法的相關關係を說く、而もその絶對的全體が相對の絶對化に終るを免れるものではない。卽ち、その絶對が現實に絶對性を證示し得るのは無媒介對立の辯證法的統一と分裂止揚の實踐にあることを强調し得るも、その運動の中に自己否定的に自己を實現し乍らそれを包み超越する絶對者は辯證法に絶對的化せられた相對者なのである。一見すれば、哲學の哲學は唯、絶對觀念論に於てのみ可能なるが如く思はれる。併し、それが單に哲學主觀の自己内反省に止まるべきでないならば、主觀の客觀に對する優越性を如何に否定的になりとも殘存せしむるものであつてはならぬ。斯く言ふ時、それは哲學を斷念するより外はないとせらるゝことは直ちに豫想せられるが、寧ろそれが眞に絶對觀念論の窮極意圖を達成せしむ

るものであつて、哲學そのものの廢棄ではなく、却つて眞の哲學の途が其處から拓かれ來る可きことは後に明かにせられるであらう。

以上に於て明かなる如く、道德的行爲に於ける實在的自己否定は單に自己内の自己否定に過ぎない。勿論其處に立脚する行爲的主觀は實踐的であり、それが現成する具體的統一態は自己の否定原理としての超越的客觀を媒介とせる自己同一性の實踐的自覺態である以上、理性の救濟といふことも自我分裂の苦惱から生成せるものであつて、かゝる態度が安易なる合理主義なのではない。その救濟も惡の强力を痛感し、峻嚴なる道德的心情を有する者のみが體得し得るものである。それは客觀的であり、現實的であつて、而もカントの當爲の純粹性をも確保してゐる。併し此處に於ては惡は否定的にして而も否定的なものではない、惡が可能であるといふことは善が單にそれに對してゞはなく、それをも包む絕對善たることの顯證なのである、惡の自由が原本的强力性を有するといふのは善をなす理性的自由の力が絕對的であることの不可缺な契機なのである。勿論それは相對觀念論の非辯證法的主觀主義なのではない、併し乍らそれが相對者の獨斷的絕對化を根柢とせるものに過ぎざることは否定できぬ。此處に想到する時我々は立場を失ふ、そこには絕對觀念論も許されぬ。かゝる絕對性の喪失は有らゆる權威の失墜である虛無に導く、殘る處は唯絕對の懷疑主義より外はない。無明の儘生死に流轉するのが人間の詐らざる姿である。我々は苦惱する自己を捉へることが

できぬ、我々が斯くあることそのことが眞の運命と云へるものなのである。我々が見る凡有の對立には統一が失はれてゐる、主體的に我を包む境に於ても多なる個は各々モナドとして放置せられてゐる。自覺的である限り人間に本來的なるこの悲劇は辯證法的なる絶對理性に由りて解決し能ふものではない、それは前に述べた如く無明を對治せる覺ではなくして正に超えらるべき妄念に外ならなかつた。それ故この絶對の懷疑を或はそれ自身矛盾的なるものとなし、或は辯證法的統一の契機をなすものと解することは此場合全然無意味であらう。若しそれが意義あるものならばその統一は絶對理性の事柄であることはできず、辯證法は絶對觀念論をも超えて成立するが如きものでなければならぬ。併し乍らかゝる辯證法の成立には相對の斷絶を要すること、而てこの斷絶が絶對觀念論に於けるが如きものであることはできぬことは今や明かである。絶對觀念論の絶對は念斷滅を經たるものではない、それは一種の觀念の絶對化に外ならなかつた。絶對の懷疑はかゝるものでは超え得ない。懷疑とは反省知の懷疑ではなく實在的なるものである。この不安は先の擇一的危機と稱せるものに外ならず、人間の自我性の終末を意味する。自我は自我に由りて超え得ない、而も非我なる絶對者に由りてもそれは不可能である。何となればかゝる超越は畢竟自我を出づるものではないからである、非我といふともそれは未だ斷せられざる自我より見られたる自我的非我に過ぎない。それは有らゆる自覺の企圖が全然無意味に歸せる懷疑は危機であり其處に住し得るものではない、それは

否定せらるべきであり超えられねばならぬ、而もかゝる否定は何等の意味にても自我の自己性を殘存せしむる自己否定であることはできぬ。然らざれば、相對の絕對否定に由る絕對への飛躍的歸入といふことも一歩も自我を出づるものではなく、斯かる絕對は自我の投影物に外ならぬのである。自我が全然無價値なる打克たるべきものなることを自知して而も途なき處に眞の懷疑苦惱がある、棄てらるべき自我を擁する自己矛盾にその根源がある。この矛盾の止揚が再び自我性への顚落に外ならぬ處に懷疑の彷徨が無果の無限流轉なることの打開し難き根本の理由がある。衝動の惡魔的直接性への沈淪もかゝる彷徨の一相態に外ならぬ。一切の人間的合理と非合理の知見、又絕對理性の辯證法的絕對合理主義の世界觀もこの彷徨的懷疑以前のものであるに過ぎなく、何等の光明をも齎すものではあり得ない。卽ち斯くの如き合理主義に於て說かるゝ辯證法的絕對統一は、こゝに現れ來つた絕對の懷疑が直面する相對か絕對かの擇一的危機には未だ撞著せざる理性の事柄なのである。

四

人間的なる一切の自己否定も亦許されざるものなる時、人間そのものの運命性の超克の途は人間性の斷滅より外はない、人間的文化の現實の否定より外はない。而してこの否定は絕對懷疑の深淵に身を投じたる體驗なくしては不可能である。懷疑とは知の懷疑に止まるのではない。道德的悔恨

と懺悔、道德的無力の痛感といふが如きことは眞に未到とより言ふ外はない、それは人間的贖ひが可能なるものに過ぎない。

人間性の斷滅と共に人間的自由に成立した一切の知見は文字通り虚無に歸する、何等の意味にても無いのである。從つて擇一も危機も存しない。有るものは絶對そのものである現實のみであり、これが唯一的眞實態に外ならぬ。相對も絶對も、闇黑も光明も、一切の分別的概念が無明に外ならぬ此處に於て、或は絶對と言ひ、或は眞實態と言ふは、一切の概念が假名無實であつて斯かる斷滅なき人間知に隨つては畢竟不可得なるが故に差別的概念の遠離を示すのである。それ故分別に由つて見る者は眞實義に到著し得ない。眞實態の言說は因言遣言的なのである。にも拘らず若し「眞實態」の眞意を了知せずして、一切の分別知の相對の否定としての單なる相對無を意味せしめたる所謂、神祕主義的無を其處に押附け、而てそれが直接的抽象的絶對に過ぎざるが爲に現實には對立の相剋に纒綿せられて統一を喪ひ結局諦觀の安易に止まる外なきものとなし去つて、眞の絶對的統一は寧ろかゝる絶對の道德的行爲に由る主客の特殊的統一に於ける否定的、辯證法的實現にあるとなすのは、今や全然虚妄に歸せる人間的理性知に止まるものなることは繰返し述べ來つた處により明かであらう。相對を斷絶せる絶對には否定せられたる相對も否定もないのである。絶對と云ふとも無執である。絶對の眞實態はそれ故何ものかに對する相對的絶對でもなく、相對と絶對との辯證法的統

一なのでもない。それ等に止まり得るのは畢竟自我性の限界を覺せざる迷妄の內に於てのみである。眞實態は無著にしてのみ眞實態である。一心不生萬法無咎なるが故に完き現實界そのものが眞實態なのである。かゝる現實の肯定がテオリヤを意味するものでないことは其處への途が如何なるものであつたかを顧るならば最早縷說を要しないであらう。體驗の世界は常に行的なのである。

眞實態の體得は純粹に宗敎のみの事柄である。それは宗敎と文化との綜合ではない。それにも拘らず、宗敎の絕對が具體的となるには、その直接性を脫して、相對の實踐的叡智と結合せられねばならぬ、然らざれば、現實界の直接性の無媒介的絕對化たる神祕的テオリヤに過ぎないとせらるゝのは何故であらうか。卽ち、先の考察に於て、擇一のみあつて綜合はないとせられた二世界の結合がなければならぬとせらるゝのは宗敎を如何に把捉してゐることに由來するのであるか。二世界が擇一的であり、その間には無底の斷があるとは、我々の世界は常に何れかの一のみであつて、現實には二世界が對峙的に同時存在するものとして體驗せらるゝものではあり得ない、若しかゝるものとして見らるゝならば、それは反省的に觀らるゝ二世界に止まつて、現實にはその對峙も統一も、一方の有限的立場に於てのみ可能なる自己內の事柄に過ぎないことを意味したのである。而してこの理性的二世界の辯證法的統一を說く絕對理性の限界を覺知せる絕對懷疑がこの有限的世界觀の終末に立つものであつた。眞實態に至つて、有限的世界觀の霧消と共に全體の現實その儘が絕對とせ

られたのである。萬法無咎である。凡有の知見は各々それとして眞實義を保持し現實界に解放されてゐる。この對立と相剋に滿ちた現實の肯定に行的に生きるのは宗教的絶對寂靜の相である。動靜一如、相對卽絶對とは眞實態がそれ等の有限的相對概念の到底證示し得る處に非ざることを意味してゐるのであつて、何等それ等相對の綜合を意味するのではない。それ故、個別者自我がその主體的實踐を通じて、常に特殊的なる歷史的現實の自己否定的進展に參與することに由つて、主客の行的統一を遂げ、此處に超越的絶對の自己否定的實現を現成するのでなければ、宗教的絶對統一は具體的相對の否定抹殺に終つて、相對に歸還するを忘るといふ宗教の絶對性に對する懸念は、上述の二世界を觀る文化の立場に現れるものといふことができる。事實上、この宗教に對する批判の解決は宗教に於てのみ可能なのである。否、かゝる批判の對象となれる宗教は宗教なのではなく、批判は宗教に觸れたるものではない故、その「宗教」も、從つてそれに對する批判も眞實には無明としての意義のみを有する。宗教への途は無門である。自我性斷滅の終末的危機は一瞬一瞬に現前してゐる。それ故道德的惡も亦かゝる轉機をなす、併しそれは惡ではなくして罪である。惡は理性的自我に由りて贖ひ得るものに過ぎない、其處には危機的悲劇はない。道德は現實そのもの、自己そのものの運命を覺することなく現實を肯定する、自己に由る自己否定のみあつて、自己は否定せらるゝことがないからである。絶對は自己を出でない觀られたるものに過ぎない。絶對觀念論に於けるが

如く自己否定的に自己を實現する觀られざる絶對は辯證法的に絶對化せられたる自我である。宗教と現實の道德との結合といふ絶對觀念論が宗教以前の知なることは、先の考察に於て、その有する限界の故に結果したるものが危機的懷疑なることを想ふならば容易に肯かれるであらう。

ヘーゲルの絶對的眞實態は自己實現態と同一となれる概念であつて、それは絶對精神に於て現れる。而して精神が絶對となるのは前に述べたる道德的行爲の和解に於てゞあつて、和解の統一は絶對普遍と個別との客觀精神を媒介とする統一として宗教に現れる。斯くの如き絶對精神を內容とする宗教は、神的實體が絶對主觀たる精神に外ならぬ故、絶對者が自己そのものを顯示する啓示宗教でなければならない。今、かゝる觀點から啓示宗教が如何に概念把捉せられるかを、フェノメノロギーに就いて考察するならば、和解の統一は先づ對象性に纏綿せられた「表象」に現れる。絶對精神の概念そのものなる三位一體的「父の國」が創成に由つて自己顯示せる「子の國」に於ては、自然と有限精神とが對峙的關係に立つ。こゝに自己疎外的に現れた神的子が現存する自意識として自然性を保持し、而もかゝる個別として自己否定を經て普遍たる父と現存的統一を遂げる。卽ち神的實體が自己疎外して自意識となる「神の人間化」の側面、自意識が自己を疎外して神的實體となる側面が自意識に於て統一せられる。この和解は實存的自意識の運動であつて非精神的な觀念的和解ではない。この現實となれる神的自意識は世界に現前してゐる永遠者たる「精靈」に外ならぬ。この歷史的なイ

ンカルナティオ・贖罪・復活の信仰内容は之を表象的に信仰する自意識内に於ける運動に外ならぬ。「敎團の生」が「精靈の國」である。卽ち眞實には信仰内容の神的實體が精神の自己性となると共に對象的表象の全内容がその對象性を止揚して、その諸契機の辯證法的運動は精神の自己内聯關になつてゐる。然るに、實體が主觀となれる敎團の表象的意識に於ては、和解を信仰の中に外面的に附加するに止まる故、その滿足は隨つてそれ自身一つの彼岸の對立を背負はされてゐる。現に生成せる和解は自己分裂的表象意識に於ては現實的此岸に對立する彼岸的對象性に於て卽自的に表象せられ、普遍的本質、特殊的世界、個別的自我の推論的運動がその内容をなしながら自覺せられぬ。この表象的内容を概念的に自覺するのが絕對知たる哲學であり、宗敎の内容と形式の不一致は止揚せられる。宗敎と哲學とは内容を同じくし乍ら、後者はこの内容を主體的行爲として自覺するのである。何となれば「表象」に對する「概念」とは「總ての本質と總ての存在としての自らの内に於ける自己の行爲の知、卽ちこの主觀を實體として、又實體を自己の行爲のこの知として知ることである」からである(Phänomenologie : Die offenbare Religion u. Das absolute Wissen)。卽ち概念の立場より見る時、宗敎に於ける信は自意識のそれであるが故に、對象性に於ける全内容が自己に還歸して居り、個別的自我が子の國たる現實の世界に於て、自然性を根柢とする惡に由り絕對者と外面的關係に立つのを道德的行爲によつて否定し、絕對者と行爲的統一を遂げるのである。それを自覺せず對象性

に累はさるゝ宗教の表象性は、それが同時に自意識なることを覺せざる意識一般の矛盾を脱してゐないといふのである。併し乍らこの「表象」による宗教的對象性の形式の理解は全然誤謬である。

ヘーゲルの神的實體は人間的自我を生かすもの、自我がそれに依屬する自己の絶對的本質なのである。それは人間理性が要求せる絶對に過ぎない、人間性の斷滅なき主觀に表象せらるゝかゝる神は神ではなくして理性的神、人間なのである。子の國の二元對立を背負ふ墮在的人間は元來神の生めるもの、その自己疎外であつて、神と絶對他者の關係に立つのではない、このことはヘーゲルの發出論的傾向及び絶對に對立する二元の主體的行爲に由る矛盾的統一、卽ち道徳的實踐を輕視する觀想的傾向の由來する處なのである。併しこの傾向は餘りに宗教的なるが爲にではなく、絶對統一の根柢たる絶對者が單に人間から要求せらるゝものに止まれるからに外ならない。父、子、精靈は精神の自己內聯關に解消せらるゝ絶對主觀なる理性の事柄とせられてゐるに過ぎぬのである。神が人間に對立するものとなるのは、對立二元に煩はさるゝ人間が斷せられることなくしてはあり得ない。絶對理性の辯證法的統一は神人對立以前に屬する人間的なるものに過ぎない。通常理解される他力、自力の他者性、自己性は未だ斷せられざる人間から觀られたる非宗教的なものである。人間の否定も道徳に終始する限り、自己に由る自己否定を出づるものではない。神との隔絶を意識し神の前に跪拜する我は自己否定せる我ではない、自律的なる我ではない。我は罪人である、單に理性

の自力に由り贖ひ得る惡なる我性ではない。先に斷絶的二世界は現實に體驗せらるゝことは不可能であり、假令二世界の關係を觀るとも結局唯一つの世界から觀らるゝに過ぎざることを述べた如く、イデア的宗教觀に於ける神と世界、神人の相關關係は二世界のそれではなく、文化的世界に終始するイデアの神との關係に過ぎない。道德の特殊的なる主體的實踐的統一と宗教の絶對統一の自意識的綜合に立せらるゝ絶對理性の辯證法的なる自力卽他力の統一は、一步も文化を出でたるものではない。宗教と文化、神と世界との關係を觀る一切の努力は文化的イデアの宗教と文化との關係のみを捉ふるに過ぎず、神はイデアであり自己の投影たる精神であつて、體驗の生ける事實ではない。卽ちかゝる宗教は、文化と如何に否定的關係に立つことを强調するとも文化を出づることなき一文化形態に過ぎないのである。ヘーゲルの缺陷は有神論的なることにあるのではなくして、眞に宗教たる有神論を把捉せざることにある。假令ヘーゲルの發出論的傾向を免れ、現在の瞬間に於ける道德的主體の行爲に徹底して、絶對觀念論を確立し得るとも、それは自己內に矛盾なき體系を樹立するに止まつて、現實には却つて絶對懷疑の不安を將來する。絶對觀念論に於ては神は結局イデアであり體驗ではない、若しそれにも拘らず體驗的明證性をもつといふならばそれは宗教ではなく道德に屬するものであらう。ヘーゲルは宗教が、思辨的內容を有し、從つて宗教的でもある處の、概念把捉する理性の哲學に對して抗辯するのは、かゝる哲學が悟性哲學と思惟形式を異にし辯證法的・

思辨的であることへの洞察を缺如することから生ずる、卽ち、抗辯は形式を根據とすると言つてゐる、(Encyclopädie, §573 Zusatz)。併し之は單に思辨の自負である。理性の辯證法は成程全體を、宗敎をも包んでゐる、がそれは形式的に外見上宗敎と內容を等しくし、內實は文化に止まるのである。其處には眞に絕對他者たる神は現れざる故、理性の思辨は宗敎を安易に包み人間的統一を樹立して破綻を來たさないのである。神人の絕對對立は、か丶る統一が破れ、絕對の否定に直面して人間的生死界が滅せらる丶時に現れる世界である。之が絕對他力の世界である。人間が否定せらる丶時直ちに神と一となるとし、他力卽自力と考へるのは眞の對立に到らぬ人間的神を思念する理性の立場に於てゞあつて、其處に於ける神人の對立は絕對的なるものではなく、高々理性に由り辯證法的に統一せらる丶ものに過ぎない。それは宗敎ではなくして道德的宗敎であり、イデアを出ない、結論する處は絕對自律。絕對善に過ぎない。客觀と主觀、主體的個人と個人の統一の根柢はイデア的神、卽ち絕對主觀であつて、それを根柢とする絕對觀念論は現實肯定を自明的、不可問的なる前提としてのみ成立する道德的世界觀といふことができる。斯くしては遂に絕對の眞實態には到り得ない。善は世間を得るも涅槃を得ることはできぬ。(中論、觀如來品第二十二)

人間の自由と權威の絕對否定の世界に於て現れる神人の隔絕にては人間は虛無的でなければならぬ、人間の虛無性は理性にて考へらる丶惡の强力、善の無力を意味するものでは全然ないことは言

ふ迄もない。惡と罪は意識にては異るとも內實は同一であるとするのは自我斷滅以前の宗教的體驗なき者の言である、イデアにて宗教を思念するものに過ぎない。宗教はそれと世界を異にする。神は命で、我は神命に服するのみで、我は神に就いては何事も知らぬと言ふより外はない。ヘーゲルが、絕對精神は自己を唯一の普遍的實體となすものであり、而して自己と知とへの判斷(原始分割)であるとなし、信仰は知に對するものでなく、單に知の特殊的一相態なることを述べてゐるのは、如何に彼が宗教の眞實に觸れることなく、イデアに止まれるかを示してゐる (Encycl. §554)。又人間は神を認識することができぬといふ單なる斷言が啓示宗教の內部にて立言せらるゝのは全く自家撞着的であつて、その斷言に依れば、啓示宗教は神から何一つ啓示せられてゐない、卽ち神が自己を啓示せることなき宗教となる、かゝる宗教の信者は神に就いて何事をも知らぬ異教徒となるであらう、精神たる神の知は信仰の單純な表象に甘んじ得ず思惟に進み行く、神は自己を知る限りに於てのみ神である、神の自己知は更に人間に於ける神の自意識であり、神に就いての人間の知である、この知は神に於ける人間の自己知へと進む、といふヘーゲルの叙述は、如何に彼が眞實の宗教から遠去かつてゐたかを示して餘りあるものと云ふ可きである (Encycl. §564 Zusatz)。絕對他力の信に於ては神は絕對他者であり、自己は無にして跪拜するのである。自己が全くの無になるとは神のみがあるといふこと、換言すれば對立の止揚に外ならぬ。絕對者のみがあるとは對立する神も

我も最早なきことであり、對立的我が絶對なのではない。こゝに絶對他力は自力となり、往は生である。この宗敎の世界のみの道相は體驗の事柄であつて、起信論に說く阿梨耶識中覺の始覺より本覺への道程が示す處のものである。自受用法身の世界は唯佛與佛の世界であり、こゝに自在がある。往生の道相は辯證法的であり、そこに信仰の論理が見られるが、神人の關係は飽く迄宗敎の世界に屬し、自我はかの斷滅以前の自律的なるものであるを許さぬ。

此處に眞實態は絶對そのものである全體的現實である。こゝに初めて絶對否定の絶對肯定が眞實義を有するのであつて、否定も肯定もイデアのことではなくして實在的である。主觀客觀の何れか一方の他に對する優越性を根柢とする諸體系は如何に辯證法的なりとも相對的絶對を捉ふるに過ぎぬ、相對者に自性を立て絶對化するからに外ならぬ。眞實態に於ては何ものからも出發するのではない、あるものは現實のみである。眞實態は自我の如きものが自證するのではない、現實そのものの自證なのである、眞實態は自證的といふより外はない。自證的眞實態の哲學はそれ故最も純一なる現實主義といふことができる。之を以て神祕主義的同一哲學、又は主體的なる道德的行爲を稀薄にする宗敎的觀想とするのは幾度か繰返し示せる如く評する立場の限界に由來するもので、此處には全く無意味である。宗敎は單なる絶對への歸入といふ言葉が意味するが如き心情的なるものではなく、全體であり世界である。道德的現實肯定は宗敎に於てのみ絶對性を有し得るのである。主觀

客觀の無媒介對立統一の根柢は絶對主觀ではない、媒介は絶對に無なるが故に對立が絶對的なのである。對立は直接統一である、統一が分裂である。それは緣起的である。主觀と客觀も、多なる行爲的主體も獨立者として絶對の無に於て共に立つのである。而してその具體的關係は絶對そのものである現實の絶對肯定に於て考察せられるのである。自證的眞實態の哲學的解明はこの現實を始原とし、その論理は必然因言遣言的なる辯證法であり、而して絶對觀念論に殘存した主觀性、觀念性を脫したるものでなければならぬ。卽ちヘーゲルの辯證法的思辨は理性のそれではなくして宗教的叡智に成立する緣起的なるものとならねばならぬであらう。（畢）

＊此小論は卒業論文を改め補つたものである、而してカントとヘーゲルからの引用を除き體驗を基とした。勿論眞實態への途を示すに止まるものである。